

EQS（情動知能指数）と FFPQ（5 因子性格検査）間の相関的研究

大野木 裕 明

1 本研究の目的

本研究の目的は、日本で開発された EQ（あるいは情動知能または EI、以下 EQ と略する）を測定する質問紙尺度 EQS（内山・島井・宇津木・大竹，2001）について、この測定尺度がパーソナリティの Big-Five（あるいは主要 5 因子、以下 Big-Five と略する）とどのような相関関係にあるのかを調査的に検討しようとするものである。すでに大野木（2004b）においては Big-Five 測定尺度の 1 つ NEO-PI-R 短縮版と EQS との関係を検討しているので、別の Big-Five 測定尺度である FFPQ と EQS の相関関係を検討しここに報告する。

2 EQS と Big-Five 測定尺度との関係

（1）EQS について

EQS 尺度（5 件法、65 項目）は、自己対応（intrapersonal）、対人対応（interpersonal）、状況対応（situational）の 3 領域からなる自記式の質問紙である。3 つの領域のうち自己対応領域は、「もっぱら自己の心の働きについて知り、行動を支え、効果的な行動をとる能力」である。「高得点ほど、自己内部の感情過程について全般に高い能力をもち、自己に関することに限って安定した確実な生活が送れる能力がある」ことをあらわす。自己対応領域は自己洞察、自己動機づけ、自己コントロールの 3 次元から構成される。

対人対応領域は、「他者の感情に関する認知や共感をベースに、他者との人間関係を結び維持することのできる能力」である。「高得点ほど、社会的に人間関係を結び維持する能力に恵まれている」ことをあらわす。対人対応領域は、共感性、愛他心、対人コントロールの 3 次元から構成されている。

状況対応領域は、「自己を取り巻く、あるいは自己と他者を含む集団を取り巻く状況の変化に耐える力、リーダーシップ、また自己対応領域と対人対応領域の各種能力や技量を状況に応じて適切に使い分ける統制力」である。「高得点ほど、変化する状況を次々と乗り切っていかなければならない集団のリーダーとして必須な能力がある」ことをあらわす。状況対応領域は、状況洞

察、リーダーシップ、状況コントロールの3次元から構成されている。

このように3つの領域にはそれぞれ3つの次元があるが、さらにこれらの次元はまた下位尺度に分かれている(説明は略する)。

(2) FFPQについて

日本で開発・翻案され標準化されたパーソナリティ Big-Five モデルの心理検査は少なくとも3つある。1つは内山ら(2001)がEQSの構成概念妥当性を検証するために用いた村上・村上(1999)の主要5因子性格検査(BFPI)である。この検査では5因子として外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性、知性を測定する。2つは下中・中里・権藤・高山(1999)によるネオ人格目録改訂版の日本版(NEO-PI-R)である。このNEO-PI-Rは、世界の多くの国で翻案されているCosta & McCrae(1985, 1992)の日本版であり、その短縮版(60項目)も同時に開発されている。この検査では5因子として神経症傾向、外向性、開放性、調和性、誠実性を測定する。3つは辻平治郎らのFFPQ研究会(1998/2002)によるFFPQ版である。この検査では5因子として内向性-外向性、分離性-愛着性、自然性-統制性、非情動性-情動性、現実性-遊戯性を測定する。これら3つのBig-Five尺度には、次のような相関的対応関係がある(大野木, 2004a)。a) FFPQの外向性-BFPIの外向性-NEO-PI-Rの外向性、b) FFPQの愛着性-BFPIの協調性-NEO-PI-Rの調和性、c) FFPQの統制性-BFPIの勤勉性-NEO-PI-Rの誠実性、d) FFPQの情動性-BFPIの情緒安定性-NEO-PI-Rの神経症傾向(-)、e) FFPQの遊戯性-NEO-PI-Rの開放性(BFPIの知性は独自の内容を含んでいるものと考えられる)。

(3) 関連する先行研究

内山ら(2001)はEQSとBFPI間の主な関係として以下の4つをあげている。

a) 自己対応領域(EQS)と勤勉性(BFPI)間には高い相関がある($r=.441$)、b) 対人対応領域(EQS)と協調性(BFPI)間には高い相関がある($r=.452$)、c) 状況対応領域(EQS)と外向性(BFPI)間には高い相関がある($r=.420$)、d) EQSの3領域はいずれもBFPIの知性と高い相関がある(自己対応領域と.481、対人対応領域と.347、状況対応領域と.587の相関係数)。

一方、大野木(2004b)はEQSと2つめのBig-Five版であるNEO-PI-R短縮版を用いて両者の相関関係を明らかにした。これを、内山らとの一致・不一致を点検しながらまとめると次のようになる。

a) 自己対応領域(EQS)と誠実性(NEO-PI-R短縮版)の間に高い相関がある($r=.46$)。この誠実性因子は内山らの研究の勤勉性次元に対応するので、内山らと大野木(2004b)の結果は一貫している。

b) 対人対応領域(EQS)は、調和性(NEO-PI-R短縮版)あるいは外向性(NEO-PI-R短縮版)などと広く相関がある(それぞれ、 $r=.33$ 、 $r=.36$)。これは、内山らの協調性(BFPI)すなわちNEO-PI-R

短縮版の調和性だけに高い値を示しているわけではないので、内山ら（2001）と大野木（2004b）の結果は一致するとは言いがたい。

c) 状況対応領域（EQS）は、外向性（NEO-PI-R 短縮版）あるいは誠実性（NEO-PI-R 短縮版）などと広く相関がある（それぞれ、 $r=.31$ 、 $r=.35$ ）。これは、内山らの外向性（BFPI）すなわち NEO-PI-R 短縮版の外向性だけに高い値を示しているわけではないので、内山ら（2001）と大野木（2004b）の結果は一致するとは言いがたい。

d) EQS の3領域はいずれも BFPI の知性次元と高い相関的関係を示す。他方、NEO-PI-R 版そのものには知性に対応する次元は見られず、実際のところ大野木（2004b）の NEO-PI-R 短縮版でも3領域に広く相関を示す次元そのものが見出されない。

e) EQS と情緒安定性（BFPI）あるいは神経症傾向（NEO-PI-R 短縮版）間には有意でないか低い相関しか見られない。これは、大野木（2004b）、内山ら（2001）ともに一致している。

（4）本調査における作業仮説と目的

本研究の目的は、3つめの Big-Five 検査である FFPQ と EQS の関係を検討することにある。以上にみたように、内山ら（2001）あるいは大野木（2004b）の結果をもとにすると少なくとも以下の3つの作業仮説および2つの検討課題を設定することができるだろう。

内山らの EQS の自己対応得点が BFPI の勤勉性得点と関連する結果から、本研究では、a) EQS の自己対応得点は FFPQ 版の統制性得点と高い相関を示すだろう。

内山らの EQS の対人対応得点が BFPI の協調性得点と関連する結果から、本研究では、b) EQS の対人対応得点は FFPQ の愛着性得点と高い相関を示すだろう。

内山らの EQS の状況対応得点が BFPI の外向性得点と関連する結果から、本研究では、c) EQS の状況対応得点は FFPQ の外向性得点と高い相関を示すだろう。

さらに、明確な作業仮説を立てることは難しいが、大野木（2004b）を踏まえると、次の点について予想することができよう。d) EQS の3領域と FFPQ の遊戯性次元との関係はどうであるか。遊戯性次元は、それぞれ統制性、愛着性、外向性と同程度の関連性かどうか。e) EQS の3領域と第4因子の情動性次元との関係はどうであろうか。これまでの2研究では、情動性は5因子の中で一番低い値になっている。

方 法

調査協力者 欠席等による記入漏れを除いた分析の対象は、2004年度～2005年度前期に筆者が担当した6つの心理学関連科目の受講学生であり合計213名（男子学生85名、女子学生128名）であった。すべて1～2年生であり、学生の所属は工学部、教育地域科学部、医学部看護学科、医療技術系専門学校であった。

手続 同一の調査協力者に対して EQS、FFPQ の 2 種類の心理検査への回答を求め統計処理をおこなった。

得点化 EQS、FFPQ のそれぞれの検査マニュアルに従って採点し得点化した。

結 果

1 EQS の平均値、相関係数

Table 1 に EQS の尺度間の相関係数および平均値をまとめた。EQS の 3 領域の相互相関は Table の右下にあるように、.59、.59、.51 とかなり高かった。自己対応領域とその 3 つの下位尺度とは .68、.74、.81、対人対応領域とその 3 つの下位尺度とは .80、.76、.74、状況対応領域とその 3

Table 1 EQS (情動知能指数) 尺度得点間の相関係数および平均値 (標準偏差)

尺度	2)	3)	4)	5)	6)	7)	8)	9)	10)	11)	12)	平均 (標準偏差)
1) 自己洞察	.44	.44	.40	.28	.52	.56	.51	.59	.68	.45	.61	3.46 (1.00)
2) 自己動機づけ		.58	.41	.37	.45	.32	.35	.35	.74	.52	.37	3.47 (1.05)
3) 自己コントロール			.31	.31	.37	.50	.41	.42	.81	.41	.47	3.16 (1.03)
4) 共感性				.61	.56	.33	.35	.36	.47	.80	.41	3.81 (0.99)
5) 愛他心					.45	.27	.22	.25	.40	.76	.27	3.72 (1.04)
6) 対人コントロール						.55	.62	.62	.57	.74	.65	3.46 (0.96)
7) 状況洞察							.54	.60	.57	.41	.78	3.24 (1.00)
8) リーダーシップ								.66	.49	.49	.80	3.14 (1.05)
9) 状況コントロール									.56	.47	.80	3.41 (1.04)
10) 自己対応領域									.59	.59		3.27 (0.97)
11) 対人対応領域										.51		3.65 (0.97)
12) 状況対応領域												3.24 (1.00)

n = 213 ピアソンの相関係数はすべて $p < 0.01$

Table 2 FFPQ 版 5 因子間の相関係数と平均値 (標準偏差)

5 因子	2)	3)	4)	5)	平均値 (標準偏差)
1) Ex 外向性-内向性	.24	.36	-.29	.35	49.43 (9.50)
2) A 愛着性-分離性		.38	-.24	.25	50.68 (9.49)
3) C 統制性-自然性			-.33		49.71 (8.84)
4) Em 情動性-非情動性					51.23 (10.01)
5) P 遊戯性-現実性					48.10 (9.01)

n = 213 数値はすべて $p < 0.05$

Table 3 FFPQ（5因子性格検査）下位尺度得点の平均値（標準偏差）

超特性／要素特性尺度	平均値（標準偏差）
Ex 外向性－内向性	
Ex 1 活動－非活動	49.93 (8.59)
Ex 2 支配－服従	48.13 (9.82)
Ex 3 群居－独居	51.92 (9.54)
Ex 4 興奮追求－興奮忌避	48.14 (9.24)
Ex 5 注意獲得－注意回避	48.45 (10.05)
A 愛着性－分離性	
A 1 温厚－冷淡	49.30 (8.52)
A 2 協調－競争	50.36 (9.89)
A 3 信頼－警戒	51.32 (9.03)
A 4 共感－非共感	51.08 (9.98)
A 5 他者尊重－自己尊重	49.88 (10.08)
C 統制性－自然性	
C 1 几帳面－大まか	49.33 (9.18)
C 2 執着－無執着	49.20 (9.25)
C 3 責任感－無責任	48.43 (9.14)
C 4 自己統制－衝動	50.79 (8.57)
C 5 計画－無計画	50.27 (9.32)
Em 情動性－非情動性	
Em 1 心配性－のんき	50.56 (9.69)
Em 2 緊張－弛緩	51.51 (9.56)
Em 3 抑うつ－非抑うつ	50.88 (10.51)
Em 4 自己批判－自己受容	51.43 (10.01)
Em 5 気分変動－気分安定	51.57 (8.52)
P 遊戯性－現実性	
P 1 進取－保守	48.22 (9.73)
P 2 空想－実際	49.01 (9.73)
P 3 芸術への関心－無関心	49.86 (9.33)
P 4 内的敏感－内的鈍感	48.02 (9.89)
P 5 奔放－堅実	48.23 (9.78)

n = 213

係数が.40以上を目安として概観を探りながら作業仮説をも検証していく。

自己対応領域では愛着性 (.41)、統制性 (.42) が高くなっている。さらに3つの下位尺度をみると、自己洞察尺度では5因子のすべてにわたって.30～.40にある。自己動機づけ尺度では統制性 (.43)、自己コントロール尺度でも統制性 (.48) が.40以上になっている。仮説1は、EQSの自己対応得点がFFPQ版の統制性得点と高い相関関係にあることであり、これは認められたとい

つの下位尺度とは.78、.80、.80となっていて数値はかなり安定していた。また、相関係数の全般的な大きさと傾向も前報(大野木, 2004bのTable 1) とほぼ同じであった。

平均値をみると、自己対応領域および下位尺度、状況対応領域および下位尺度に比べて、対人対応領域が少し高くなっており、特に共感性、愛他心が高い傾向が見られた。これもまた、前報(大野木, 2004bのTable 1) とほぼ同じ傾向であった。

2 FFPQの平均値、相関係数

Table 2にFFPQの5因子間の相関係数および平均値をまとめた。平均値はほぼ50の近くにあった。因子間の相関係数は、絶対値で.11～.38であった。FFPQマニュアルには示されていないが、大野木(2004a)では絶対値で.099～.384となっていて、本研究もそれとかなり類似した大きさの数値になっている。なお、Table 3にはFFPQの下位尺度別にみた平均値と標準偏差をまとめた。平均値はいずれも50前後にあり、特に目立った値は見られない。標準偏差もほぼ10前後になっている。

3 EQSとFFPQの相関関係

本研究の作業仮説を検証するために、Table 4にEQSとFFPQ間の相関係数をまとめた。4つを除いてすべて5%有意水準で有意ではあるが、突出した数値は見られない。そこで相関

Table 4 EQS (情動知能指数) と FFPQ (5 因子性格検査) 間の相関係数

EQS/FFPQ	Ex 外向性	A 愛着性	C 統制性	Em 情動性	P 遊戯性
自己洞察	.35	.35	.33	-.32	.33
自己動機づけ	.31	.39	.43	-.16	.27
自己コントロール	.24	.26	.48	-.26	.23
共感性	.28	.44	.18		.41
愛他心		.41	.14		.19
対人コントロール	.50	.51	.34	-.26	.31
状況洞察	.35	.31	.22	-.36	.29
リーダーシップ	.46	.31	.41	-.25	.36
状況コントロール	.43	.34	.35	-.38	.30
自己対応領域	.30	.41	.42	-.27	.33
対人対応領域	.34	.54	.26		.34
状況対応領域	.47	.35	.34	-.42	.34

n = 213 数値はすべて $p < 0.05$

えよう。

対人対応領域では愛着性のみが.54と高く、他とは.20以上離れている。さらに3つの下位尺度をみると、共感性尺度では愛着性(.44)と遊戯性(.41)、愛他心尺度では愛着性(.41)、対人コントロール尺度では外向性(.50)、愛着性(.51)が高く、一貫して愛着性との結びつきが強い傾向が認められる。したがって、予想通り、仮説2のEQSの対人対応得点はFFPQの愛着性得点と高い相関関係にあることが認められよう。

状況対応領域では外向性(.47)、情動性(-.42)が.40以上となった。3つの下位尺度をみると、状況洞察尺度では該当しないが外向性は.35の値を示し、リーダーシップ尺度では外向性(.46)、統制性(.41)が該当している。状況コントロール尺度では外向性(.43)が高い。したがって、仮説3に関しては、予想通り、EQSの状況対応得点はFFPQの外向性得点と高い相関関係にあることが認められよう。以上3つの仮説はいずれも認められたと考えられる。

本研究ではこのほかに上記仮説の周辺について次の2点の検討を試みようとした。1つ目は遊戯性次元に関してであった。まずEQSの自己対応領域とFFPQの遊戯性であるが、これは統制性よりも大きいということではなかった。次に、EQSの対人対応領域との間であるが、これも愛着性よりも大きいということではなかった。最後にEQSの状況対応領域との間であるが、これも外向性よりも大きいということではなかった。2つ目は情動性次元についてであった。情動性はEQSの状況対応領域との間で-.42の相関を示していて、これは外向性につぐ大きさであった。ただし、情動性は、EQSの対人対応領域では有意にならず、自己対応領域では有意ではあるが5つの因子の中で一番小さかった。

Table 5 EQS と Big-five に関する 3 つの相関研究の対照表

1) EQS の自己対応領域と Big-Five（あるいは主要 5 因子）との相関係数					
BFPI	外向性 (.299)	協調性 (.337)	勤勉性 (.441)	情緒安定性 (.184)	知性 (.481)
NEO-PI-R	外向性 (.16)	調和性 (.12)	誠実性 (.46)	神経症傾向 (-.24)	開放性 (.24)
FFPQ	外向性 (.30)	愛着性 (.41)	統制性 (.42)	情動性 (-.27)	遊戯性 (.33)
2) EQS の対人対応領域と Big-Five（あるいは主要 5 因子）との相関係数					
BFPI	外向性 (.304)	協調性 (.452)	勤勉性 (.305)	情緒安定性	知性 (.347)
NEO-PI-R	外向性 (.36)	調和性 (.33)	誠実性 (.29)	神経症傾向	開放性 (.24)
FFPQ	外向性 (.34)	愛着性 (.54)	統制性 (.26)	情動性	遊戯性 (.34)
3) EQS の状況対応領域と Big-Five（あるいは主要 5 因子）との相関係数					
BFPI	外向性 (.420)	協調性 (.364)	勤勉性 (.367)	情緒安定性 (.247)	知性 (.587)
NEO-PI-R	外向性 (.31)	調和性 (.15)	誠実性 (.35)	神経症傾向 (-.27)	開放性 (.22)
FFPQ	外向性 (.47)	愛着性 (.35)	統制性 (.34)	情動性 (-.42)	遊戯性 (.34)

注. BFPI は内山ら (2001) の研究 [n=858]、NEO-PI-R は大野木 (2004b) の研究 [n=398]、FFPQ は本研究 [n=213] ピアソンの相関係数はそれぞれ $p < 0.05$ の値のみがこの中に数値を掲載

考 察

ここでは本研究、内山ら (2001)、大野木 (2004b) の 3 研究を総合的に対比して、EQS と Big-Five との相関的な対応関係に焦点化した考察をおこなう。

Table 5 に EQS とパーソナリティ Big-Five 3 種の検査との相関係数を整理した表を示す。EQS は内山ら (2001) の開発した尺度である。Big-Five については、内山ら (2001) の研究では BFPI 版、大野木 (2004b) では NEO-PI-R 短縮版、本研究では FFPQ が用いられている。サンプル数 (ケース数) の大きさには違いがあるが、統計的に有意な値だけが数値として示してある。

EQS の自己対応領域は明らかに、第 3 因子である BFPI 版の勤勉性、NEO-PI-R 短縮版の誠実性、FFPQ 版の統制性のいずれとも有意に高い相関がある。加えて、第 5 因子である BFPI 版の知性も高い値を示す。この BFPI 版の知性は NEO-PI-R 版の開放性、FFPQ 版の遊戯性と比べて独自の部分を備えた次元であることが知られていて (大野木, 2004a)、Table 5 においても自己対応領域と開放性、自己対応領域と遊戯性との間の相関は相対的に低い。なお、自己対応領域と FFPQ 版の愛着性の間の相関も .41 であるが、しかしながら BFPI 版の協調性、NEO-PI-R 版の調和性の値から判断してこの第 2 因子が自己対応領域と高い相関を示すとは言い切れないだろう。第 4 因子である BFPI 版の情緒安定性、NEO-PI-R 版の神経症傾向、FFPQ 版の情動性は 5 つのうちで一番関連性の弱い Big-Five 因子となっている。

EQS の対人対応領域は明らかに、第 2 因子すなわち BFPI 版の協調性、NEO-PI-R 版の調和性、FFPQ 版の愛着性との間で相対的に高い相関を示している。第 5 因子である BFPI 版の知性も高

い値になっていて、これはさきの自己対応領域でみられた傾向と類似している。第4因子との間
が5つのうちで一番関連性の弱い点も同じである。なお、第1因子である外向性に対する相関は
3つのBig-Fiveともに.30以上を示している。これらのことから判断すると、対人対応領域はBig
-Fiveのうちで第2因子(BFPI版の協調性、NEO-PI-R版の調和性、FFPQ版の愛着性)と最も結びつきが
強いものの、版によっては他の因子(特に外向性)にも関連性を示しているといえよう。

EQSの状況対応領域は、第1因子すなわちBFPI版の外向性、NEO-PI-R版の外向性、FFPQ版
の外向性との間で相対的に高い相関を示している。相対的に見ると、第1因子との結びつきが最
も強いと考えられよう。しかしながら、そのほかの大きな特徴として、EQSの状況対応因子は
Big-Fiveの版によって他の因子にも高い相関を示すことも認められる。BFPI版では、上記の自
己対応領域、対人対応領域と同様に、第5因子の知性との関連が強い。相関係数は最も大きな.5
87を示している。NEO-PI-R版においては、第3因子の誠実性とも.35の値になっている。FFPQ
版では5因子すべてに対して.30以上の値になっている。したがって、対人対応領域は、外向性
と結びつきが強いものの、それにとどまらず他の4因子にわたっても広く何らかの関連性をもつ
ものといえよう。

以上のように、内山ら(2001)、大野木(2004b)、本研究の3研究を総合的に考察すると、EQS
がパーソナリティBig-Fiveと相関関係をもつことは広く具体的に実証されたといえよう。とこ
ろで、EQあるいはEIがBig-Fiveと関連性をもつかどうかは、EQやEIをどのような方法で測
定するかに依存する。たとえば、パーソナリティ特性面を強調するEQ-i(Bar-On Emotional Quotient
Inventory, Bar-On, 1997; 2000)を用いてBig-Fiveとの関係を見出した研究(Dawda & Hart, 2000)もある
一方で、EQの能力的な面を測定するMSCEIT(Mayer-Salovey-Caruso Emotional Intelligence Test, Mayer et
al., 2002ab)を用いた研究(Brackett, Mayer & Warner, 2004; Lopes, Salovey & Straus, 2003)でもBig-Fiveとの
関係が示されている。このように海外のEQ研究ではEQ測定尺度の開発研究とともに、EQの
能力的な面とパーソナリティ的な面について分析的な検討が試みられている。これに比して日本
のEQ研究は始まったばかりであるので、今後の研究蓄積が必要とされるだろう。

要約

本研究の目的は、日本で開発されたEQ(あるいは情動知能またはEI、以下EQと略する)測定尺度EQS
(内山・島井・宇津木・大竹, 2001)について、この測定尺度がパーソナリティのBig-Five(あるいは主
要5因子、以下Big-Fiveと略する)とどのような相関関係にあるのかを調査的に検討しようとする
ことである。学生213名(男子学生85名、女子学生128名)に対してEQSとFFPQ(Big-Five測定尺度の1
つ)への回答を求め相関的分析をおこない次のような結果を得た。a) EQSの自己対応領域では
FFPQの愛着性(.41)、統制性(.42)との相関が高かった。b) EQSの対人対応領域ではFFPQの
愛着性との間のみが.54と高く、他とは.20以上離れていた。c) EQSの状況対応領域では外向性
(.47)、情動性(-.42)が高く、このほかの因子とも広く関連性が見られた。d) EQSの3つの領

域ともに、Big-Five の第 5 因子である遊戯性との間には相対的に見て突出した相関は認められなかった。e) EQS と Big-Five 第 4 因子の情動性とは顕著な相関はみられなかったが、どちらかという状況対応領域とは強い結びつきを示した。最後に、EQS と 3 つの Big-Five 版（本研究における FFPQ 版、内山らにおける BFPI 版、大野木 [2004b] における NEO-PI-R 版）との相関研究の結果を総括して次のように考察した。相対的に見ると、EQS の自己対応領域は Big-Five 第 3 因子（BFPI 版の勤勉性、NEO-PI-R 版の誠実性、FFPQ 版の統制性）、EQS の対人対応領域は Big-Five 第 2 因子（BFPI 版の協調性、NEO-PI-R 版の調和性、FFPQ 版の愛着性）、EQS の状況対応領域は Big-Five 第 1 因子（BFPI 版の外向性、NEO-PI-R 版の外向性、FFPQ 版の外向性）ともっとも相関的関連性が強い。しかしながら必ずしも顕著な一貫した対応関係が見られるとは言いがたい。Big-Five 第 5 因子については BFPI 版知性は EQS の 3 つの領域いずれにも高い相関を示すが、他の NEO-PI-R 版と FFPQ 版の第 5 因子においては EQS の 3 つの領域との相関は相対的に強くはなかった。Big-Five の FFPQ 版は 5 因子ともに EQS の状況対応領域と関連性が見られた。このように 3 種の Big-Five 測定尺度はすべてが首尾一貫しているとはいえないが、EQS との間に関連的な対応関係があることは確かである。したがって、EQS 版がパーソナリティ特性と関わりを持つことは実証されたものと考えられる。

引用文献

- Bar-On, R. 1997 Development of the Bar-On EQ-i : A measure of emotional intelligence. Chicago : *Annual Convention of the American Psychological Association*.
- Bar-On, R. 2000 Emotional and social intelligence : Insights from the *Emotional Quotient Inventory (EQ-i)* In R. Bar-On & J. D. Parker (Eds.). *The handbook of emotional intelligence*. San Francisco : Jossey-Bass. Pp.363-388.
- Brackett, M. A., Mayer, J. D., & Warner, R. M. 2004 Emotional intelligence and its relation to everyday behaviour. *Personality and Individual Differences*, 36, 1387-1402.
- Costa, P.T.Jr., & McCrae, R.R. 1985 *The Neo Personality Inventory manual*. Odessa, Fla. : Psychological Assessment Resources.
- Costa, P.T.Jr., & McCrae, R.R. 1992 *NEO-PI-R professional manual : Revised NEO Personality Inventory(NEO-PI-R)and Neo Five-Factor Inventory(NEO-FFI)*. Odessa, Fla. : Psychological Assessment Resources.
- Dawda, D., & Hart, S.D. 2000 Assessing emotional intelligence : Reliability and validity of the Bar-On Emotional Quotient Inventory (EQ-i) in university students. *Personality & Individual Differences*, 28, 797-812.
- FFPQ 研究会（編）1998/2002 *FFPQ（5 因子性格検査）マニュアル* 北大路書房
- Lopes, P. N., Salovey, P., & Straus, R. 2003 Emotional intelligence, personality, and the perceived quality of social relationships. *Personality & Individual Differences*, 35, 641-658.
- Mayer, J. D., Salovey, P., & Caruso, D. 2002a *Mayer-Salovey-Caruso Emotional Intelligence Test (MSCEIT), version 2.0* Toronto, Canada : Multi-Health Systems.
- Mayer, J. D., Salovey, P., & Caruso, D. 2002b *MSCEIT technical manual*. Toronto, Canada : Multi-Health Systems.
- 村上宣寛・村上千恵子 1999 *主要 5 因子性格検査の手引き* 学芸図書
- 大野木裕明 2004a 主要 5 因子性格検査 3 種類の相関的資料 *パーソナリティ研究* 12, 82-89.

- 大野木裕明 2004b 情動知能指数 (EQS) と自我態度スケール (EAS) および短縮版ネオ人格目録改訂版 (NEO-FFI) 間の相関的関連性 *福井大学教育地域科学部紀要 (第IV部)* 60, 1-8.
- 下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山緑 1999 *NEO-PI-R、NEO-FFI 共通マニュアル* 東京心理
- 内山喜久雄・島井哲志・宇津木成介・大竹恵子 2001 *EQS マニュアル* 実務教育出版